

設立50周年特集 (第1回)
主催講座の変遷と課題

大阪自然環境保全協会は1976年4月8日に社団法人として設立され、来年2026年に設立50周年を迎える。会員の皆様の熱い思いが半世紀にわたる活動を支え、大阪における自然環境保全について一定の役割を果たしてきた。しかし、現状は会員の高齢化で会員数は少しずつ減少し、コロナ禍で減少したイベントの回数や参加者数は、5年たってもまだ十分には回復できていない。また、大阪とその周辺地域でも自然環境保全の課題が山積しているが、それを解決するための活動が十分できているとは言えない現状がある。

これまで「都市と自然」では254号(1997年5月号):20周年記念特集号、367号(2006年10月号):30周年特集号を発行し、487~490号(2016年10~2017年1月号)で40周年特集記事を連載して、最終的には4号の合本で特集号を作成してきた。そこで、50周年を迎えるこの機会に、協会設立時から現在までの歴史を振り返り、次の50年に向かってどのように引き継いでいくべきかをみんなで考えるために、本号より数回にわたってテーマ別に特集を組むことを計画した。第1回は「主催講座の変遷と課題」を取り上げる。

はじめに

文 木村 進(編集委員)

協会は定款に定めるように、「私たちは、人類が生態系の健全な営みの下でのみ生存できること、及び人為による生態系の損傷・破壊が深刻化していること、これらが人類の広範な社会活動に起因していることを強く認識する。この法人は、これらの認識に基づいて、自然環境の保護・保全・回復に努めること」を目的として活動している。この目的を実現するために、1.理事会を中心に法人組織を確立し、2.身近な自然への興味を深めるための観察会、3.さらに自然環境保全の知識や技能を高める講座、4.自然の現状を明らかにして保全すべき自然を見つけるための調査活動、5.それらの成果の上に立って自然環境の保護・保全・回復をめざす活動 を行っている。特集ではこれらの5つのテーマについて取り上げていきたい。

本号ではまず1回目として「主催講座」について取り上げたい。協会

では設立以来、特色のある講座を立ち上げ、多数の受講生を得て、その多くは協会に加入していただき、観察会や里山保全活動のスタッフなど協会活動の中心となっていた。2020~2024年の5年間の新入会員103人中60人(58%)が講座修了生であり、協会への入口と

して重要な役割を果たしている。しかし、受講生やスタッフの減少に悩まされている講座も多い。本号では現在も継続されている6つの講座(下の年表の★印)のスタッフにこれまでの経緯を振り返っていただくとともに、協会の主催講座の今後についても考えてみたい。

表 講座ミニ年表

1976年	大阪自然環境保全協会設立	★:現在も継続中
1977年	★ナチュラリスト入門講座開講(2025:第50回)	☆:形態を変えて継続中
1989年	グリーンレンジャー養成研修開講 生態学入門講座開講	
1990年	★自然観察インストラクター養成講座開講(2025:第32回)	
1991年	☆里山入門講座開講(里山保全管理指導者養成講座) みどり学講座開講、自然保護技術講座開講	
1994年	☆大阪シニア・自然大学開講(平日開催)⇒2002年独立	
1995年	☆大阪自然大学開講(夜間と土曜開催)⇒2002年独立	
1995年	★初心者のための自然かんさつ塾開講(2024:第32回)	
1997年	☆里山管理リーダー養成講座開講	
2003年	★自然環境市民大学開講(2024:第21期) ☆里山ホリデー入門講座開講	
2007年	★プロジェクトワイルド・エデュケーター講習会開講	
2014年	草地生態系保全講座開講	
2017年	★新・里山講座開講(2025:第8回)	

ナチュラリスト入門講座

文 常俊 容子(ナチュラリスト入門講座スタッフ)

それはシカから始まった・・・

シカは全国同様大阪でも一時絶滅が危惧され、環境省(当時環境庁)によりメスジカに加え1974(S49)年オスジカも禁猟とされます。その後農林業被害の増加とともに狩猟再開のタイミングが計られる中、保全協会は大型野生哺乳類であるシカを「北摂の自然環境(里山)の重要な指標」という位置づけで1977(S52)年より調査等活動を開始。フィールドワーカー育成のため、1978(S53)年1月、世界野生生物基金日本支部(WWFJ)の助成を得て「ナチュラリスト入門講座」スタート。同年、大阪府委託の大阪府猟友会によるシカ生息調査に参加。また里山保全キャンペーンの一環として1983(S58)年「里山動物一斉調査」スタート。(現「里山一斉調査」今年第43回)

1984(S59)年末から連続発生した箕面市におけるシカ大量殺傷事件を契機に1986(S61)年に関西自然保護機構助成を得て、約10年間の調査活動の報告「野生鹿の慟哭」作成。同年、農林業被害の増加を受け12年間の捕獲禁止措置を経て狩猟解禁。しかし狩猟資源としては十分ではないとして1994(H6)年まで自粛されることになります。この間生息数は増加(回復)し分布域は拡大、1979(S54)年推定約60頭が2000(H12)年には推定約2,000頭に。(現在ほぼ6,000～10,000頭)

「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に

関する法律」が、それまでの狩猟主体から「自然環境の恵沢を受ける国民生活の確保及び地域社会の健全な発展」を目的として2003(H15)年改正、大阪府では第9次鳥獣保護管理事業計画2002～2007(H14～19)年度のもと「シカ保護管理計画」策定。講座で得られた知見より当初から検討会に参画、森林生態系被害に言及。(現在第13次鳥獣保護管理事業計画、シカ第二種鳥獣管理計画(第5期)2022～2027(R4～9)年)

講座ではシカの踏圧や摂食圧でササや稚樹消失、2009年北摂にカシノナガキクイムシ襲来、2018年7月豪雨、9月台風で大規模な倒木発生後の森林更新が危ぶまれる様など目の当たりにしてきました。

野生動物のいる意味を考える

講座のフィールド北摂では近年ツキノワグマ往来。約半世紀の丘陵部大規模開発に伴い減少したキツネは近年街で出没情報が増加。農地林地の放棄や山麓の開発で緩衝帯消失、また外来生物アライグマ、ハクビシンは増加の一途。野生哺乳類と人との新たなフェーズです。

「人間-土地-野生動物」の関係の行方を決める社会的根拠は、



♂鹿フィールドサイン観察
(青貝山にて 2025.10.18)

「公共信託財」である野生哺乳類を土地所有者や農林業従事者だけでなく、街住みの私たちがどう評価し、社会的位置付けをするかが肝要。「かわいい(かわいそう)」「きたない」「こわい」の3Kではなく、野生、野性を畏敬の念を持って理解する、講座はその第一歩です。

NOB(講座OB)の活動

OBは当講座他、「里山一斉調査」企画運営、万博記念公園の哺乳動物調査、「野生シカ調査会」として大阪府モニタリング調査、大阪府環境農林水産研究所生物多様性センターのカメラトラップ協力など、自主調査や委託調査、他団体調査にも協力。長年NOBフィールドの高槻市本山寺のモミ・ツガ・アカガシ林では「本山寺自然環境保全地域を考える協議会」に参画、「自然共生サイト」認定に力を尽くしました。研究者や地方で活躍する隠れNOBも各地に!

50周年記念!

ナチュラリスト入門講座

Wild わき道より進めよの道・Walk Watch Wonder

身近な里山で野生哺乳動物のフィールドデザインを体験しよう!
定例講座・ワンセブ講座に、野生動物の生態や暮らし方を学ぶ

人と自然を考える講座です! 2025年

10/11土	オリエンテーション ※大阪府の哺乳動物 身近に生息する野生哺乳動物を探そう!	12/20金	野生動物と人との関係 賢明な付き合いに向けて ※講師: 池田/市立自然史博物館
10/18土	フィールドワーク 豊能町・青貝山 シカと人との関わり	1/12月曜	シカと人との関わり 池田/市立自然史博物館 動物の生態に学ぶ一歩
11/22-23土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	2/7土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係
12/6土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	2/20金	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係
12/13土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	3/7土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係
12/20金	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	3/26木	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係
1/13土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	4/11土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係
2/20金	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係	4/26土	動物の生態と人との関係 動物の生態と人との関係

※講座終了後、次期講座以降は一定条件でスポット参加できます。詳しくは...

定員 20名(定員超過: 高校生以上(倍))
定額制 1200円(※定員超過: 交通費は別) (※会費正会員1000円)
申込み <住所・氏名・年齢・性別・メール・電話番号・会員がご記入の上、
協会HPお問合せフォーム、FAX、Eメール、申込URL、QRコード等より
お問い合わせ>
〒530-0041 大阪市北区天神橋1-9-13ハイム天神橋202
公益社団法人 大阪自然環境保全協会 NOB・BOX
TEL 06-6242-8720 / FAX 06-6881-8103 E-mail office@nature.or.jp

今期の講座チラシ

自然観察インストラクター養成講座について

文 梅村典克(インスト講座スタッフ)

報告
第1期 自然観察インストラクター

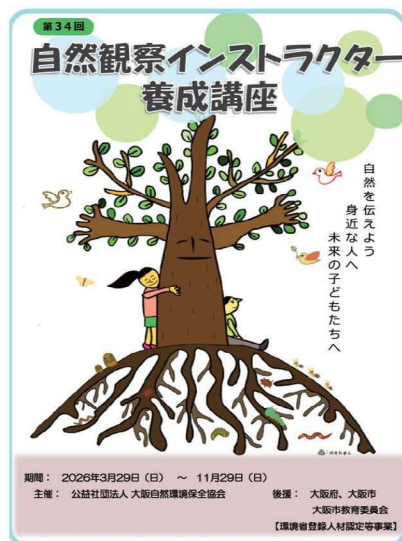
自主運営で観察会を

自然保護活動の原点は自然を愛する気持ちをもつ仲間を増やしてゆくことです。様々な行事を通じて自然のすばらしさを伝える仕事は、保全協会の重要な柱に位置しており、社会的にもこの分野での人材が切望されている中、私達はこの講座を開設しました。5カ月にわたる塾生場の講座は、3月31日の観察の実施をもって16名の修了生(受講生22名)を無事送り出す事ができました。講座の前半では自然そのものと自然保護理念および自然観察会等についての基礎知識を学ぶとともに、また後半は自然観察会のノウハウを学ぶ事よりも、自分達で行事を企画し運営する力を養う事に力点を置きました。そのため講師陣の助言は最低限にとどめ、受講生同士による討論とフィールドの下見を幾度となく繰り返します。広報も含めた全ての下準備を自主運営でやり抜い

た上での観察は大成功となりました。そしてなにより、この過程で受講生全体が、ひとつのすばらしい運営チームへと育っていった事が重要です。修了生の方々には、今後はOJチームの一員として、また保全協会の行事や地域グループのリーダー等として随時みなさんのお目にかかることがあるかと思いますのでその際は暖かい応援をよろしくお願いします。

(担当理事 富川)

「都市と自然」1991年3月号より



第34回講座のチラシ



インスト講座の修了生が多数スタッフ活動するカレーライスを本当に手作りするPJ～稲刈りを終えて～

自然観察インストラクター養成講座(以下インスト講座)は本年2025年度第33回の修了式を無事終え、1990年に第一回講座が開催されてから、35年の歴史を刻みました(コロナ禍で2年休講)。社会情勢は変遷、インスト講座の役割も変わり、社会からの新しい役割・要求に伝えていかなければインスト講座の存続は難しいでしょう。協会50周年の特集にあたり、設立当初を振り返るとともに今後について考えてみたいと思います。

第一回講座について

冒頭の記事は1991年3月に第1回インスト講座を終えて報告、投稿されたものです。インスト講座の開催原理が「自然保護活動の原点は」という文言から始まっていることから分かる様に、当時の社会情勢、協会の位置づけが色濃く反映されています。70年代の私の小中学校の頃を思い起こすと、車は水色や灰色、酷いものは黒色の排気ガスを吐き散らし、そこで呼吸すると吐き

そうになり、草野球をしていた空き地や稲刈り後の田んぼは住宅地になり、家族旅行で伊勢志摩に海水浴に行った際、海に潜り海水面を見上げると、ごみや廃油ボール、垢のようなものが浮かんでいて、海中でまた吐きそうになったそんな記憶がたくさんあります。子供ながらに自然保護活動の思いが芽生えた時期です。

時代が進み現在、排気ガスをまき散らす自動車を製造したり、廃液を垂れ流したりするような工場企業は社会から退場を余儀なくされる世の中になっています。人、社会、企業、行政の意識も環境保護の面で大きく向上しました。そんな社会変遷の中で、インスト講座に求められるニーズも変化し、それに伝えていかねばなりません。

現在から未来へ

都会と郊外、里山、海辺との精神的距離が広がり、子供たちやその親御さん世代が、自然の中で遊ぶ、触れる、ましてや自然を愛でる

という機会が少なくなっています。これでは自然を守ろうという気持ちが起こるどころか気にもされないでしょう。ただ、親御さんたちはある程度の危機感を持っておられるようです。親御さんや大人の方々に自然に触れることへのハードルを下げ、子供たちや周囲の人たちに自然のすばらしさを伝えられる人になってもらえるよう、インスト講座はまい進したいと思います。

◇27期は8名でしたが受講生数はここ数年12~20名で推移しています。会員への登録は最近の3期で19名、全体の約18%を占めています。会員獲得の面でも協会に貢献していきたいと思います。

そよごの会(インスト講座修了生の会)

文・今枝 紀夫(そよごの会会長、インスト23期)

そよごの会は、インスト講座修了生の自主的な活動組織です。第1期講座(1990.11~1991.3)の方々の次のような思いから発足しました。

- せっかく講座を受けたのに、このまま終わってしまったら、この研修を生かす場を見つけないといけない。
- まだまだ自然について知りたい。やっと、入り口が分かった程度なのでこれからも随時研修を積んでいく機会がほしい。
- 研修を受けた仲間が仲良くなったし、今後もつき合いたい仲間なのでこのまま解散するのはもったいない。

「そよごの会」の命名者は正司真弓さん(1期)です。故・橋本安弘さん(9期)が「そよごは目立たないけれど、意外に大阪のあちこちの山で見られる。それはあたかもインストのOBがどこかで自然観察や環境保全のために活動しているのと重なる」と投稿されました。

保全協会の観察会のうち、枚岡公園・烏帽子形公園・大阪城公園・服部緑地公園の観察会は、1期~4期の講座メンバーが立ち上げたもので、「淀川自然観察会」は5期の中野勝弥さんが立ち上げられ、25周年を迎えた2022年に解散しましたが、2024年1月から北村治彦

さん(30期)が引き継ぎ、淀川水系観察会として活動中です。

2011年5月28日には、20周年記念講演会を開催し、「自然保護につながる自然観察会」のテーマで菅井啓先生に講演をしていただき、「20周年記念誌」を2012年1月に発行しました。また、およそ30年経過した2021年3月に、それまでのそよご誌338号までをPDF化し、DVDに収録して配布しました。

2025年9月末現在の会員数は107名です。



シンボルマーク(社領賢(1期)さん作成)

自然環境市民大学

文 木村 進(担当理事)

自然環境市民大学は2003年4月に第1期講座が開講され、2025年は22期講座の受講生を募集したが、希望者が少なく開講できなかった。これはコロナ禍を除けば初めてのことで、改めて市民大学の目的と意義について考えた1年であった。

開講前後の状況

開講時の状況を佐藤治雄さん(最初の担当理事)の書かれた「都市と自然」の記事を参考にまとめておきたい。当協会では1994年から長井美知夫さん(当時理事)が中心になって「大阪シニア・自然大学」を開講し、この講座の修了生が協会のイベントや出前事業で活躍されていた。私も1995年に始まった

夜間中心の「大阪自然大学(後に星組)」の植物担当講師として長井さんとカリキュラム作成について何度も相談したものである。しかし、2002年にこのグループの有志が

「NPO法人シニア自然大学(現在は認定NPO法人シニア自然大学校)」を設立して独立した。それを受けた形で平日の昼間に活動できる人材の育成をめざして、「自然そのものに関する基礎知識や理解を深め(中略)、里山保全や地域の自然環境保全など協会の活動を体系的に理解してもらう。」ことを目標に、第1回講座はスタッフ6名で進められ、年間31回で受講生は44名、受講料は5万円であった。

その後の経緯

その後、講座回数は少しずつ増加し、37~38回となった。開講10年後の佐藤理事のまとめによると、10年間で受講生は延べ256名で245名が修了された。閉講式で皆勤・精勤(欠席2日以内)を表彰しているが、該当者は毎年半数前後と非常に多く、熱心な受講ぶりがうかがえる。また、修了生の多くが「空の会」に所属して活動を継続され、市民大学のスタッフとして講座運営の中心になられた方も多い。開講当初は協会員になることを義務づけていたが、協会の公益法人化を機に、入会を希望者だけにした後も、半数以上の方が入会され、協会活動の

中心となって活躍していただいている。講座のテーマや講師は長年継続しているものが多いが、毎年見直して、数テーマは変更している。

最近の状況と今後

最近の状況を下表に示したが、2017年は受講生がやや減少し、1年間を通しての受講は負担が大き

いという声もあり、2018年から春・秋に分けて募集したところ少し持ち直した。2020年は募集したがコロナ禍で開講できず、2022年は9月から再開し15名受講、2024年は8名となり、2025年は受講申し込みがさらに減少して開講できなかった。そこで2026年については、1年

かけて市民大学の目的や意義を見直し、さらに受講生の負担の軽減を図り、講座を12回に精選して再起をはかろうとしているところである。

最近10年間の受講者数

	受講者数
2016年	22名
2017年	16名
2018年	春29名、秋25名
2019年	春17名、秋20名
2020年	コロナ禍で開講できず
2021年	コロナ禍で開講できず
2022年	9月～開講
2023年	～7月、15名
2024年	8名
2025年	開講できず



講座風景（講師：佐藤先生）



第1期募集チラシ

空の会(自然環境市民大学修了生の会)

文 山本 哲(空の会代表)

空の会は自然環境市民大学第1期生の「市民大学修了後も、OB同士の親睦を深めながら、観察会や調査・研究などを通して自然について楽しく更に学ぼう」という強い思いで、市民大学修了と同時(2004年3月10日)に設立されました。そして、「^{くう}空の会」という名前は「いろいろ知識を入れたが、一旦頭を空にして自然の中に入って行こう」との思いで付けられました。

そして、初年度から植物、昆虫、野鳥、水生生物などの観察会や自然工作を年15回以上実施し、会報「空の会だより」も年4回発行して、その後も毎年、修了生が20～30名会員になり、自然を愛する人の輪が広がり、会員間で教えてもらいなが

ら、自然について楽しく学ぶ場に発展していきました。また、会員が市民大学のスタッフを務めるとともに受講生も空の会の観察会に参加することで、順調に会員が増え、新会員が空の会の運営役員を担うことで組織として発展してきました。

しかし、コロナ禍前後から受講生

の観察会などへの参加や修了後の入会が減り、運営役員の引継ぎもスムーズに進まなくなりました。更に、市民大学の度重なる未開講もあり、会員数の維持や運営役員の新規引継ぎができず、中核会員および運営役員が高齢化して会の継続運営も困難となってきています。



顧問の佐藤先生の解説で行った観察会(2023年度総会后)

自然かんさつ塾

文 藤田 嘉久(自然かんさつ塾塾頭)

1995年、阪神大震災の余塵が未だ片付かない中、自然かんさつ塾の立ち上げを決めました。誰でも肩肘張らずに参加できて、それが自然と環境保全の活動に繋がっていく、そんな講座が出来ないものか？手始めにインストラクター養成講座のスタッフや地域で観察会を運営している人達6人で検討会を開きました。

初めは簡単に考えていたのですが、話し合いを重ねていく内に色々な問題が出てくるのです。初心者向けの入門編と単純に考えていたのですが、検討をすればする程、これは外せない、あれも伝えたい等。丁寧に考えを巡らせた結果、気が付けばかなり長いプログラムになっていました。多分、各々がいい意味での意欲や思い入れが強過ぎたのかもしれない。

それで、長期のプログラムはどうしても必要なのか？ 高い専門性、知識は本当に要るのか？ 問題意識を持っている人だけを集めるの？ 手段の自己目的化になってない？

忙しい現代を生きる普通の人の興味や関心をひく講座とは？

などを再度話し合い、絞り込んだ末に、次のような結論になりました。

(1)世間に受け入れられて(参加者を集めることができて) なんぼや。

(2)知識や理屈を詰め込んでも、行動に繋がらなければ意味は無い。と、いうような。

それで、自然保護や環境の保全に関心を持ち、行動を起こす【キッカケ作り】をコンセプトに、期間は短く、少人数でフィールドワークをベースにしたプログラムを作りました。

運営面では、専門用語や観念的、抽象的な言葉は避ける。分かりやすく具体的(自然から事実から学ぶ)に、身近な自然の存在意義そして、自分の生活との繋がりを感じられるように！ お酒でいえば、雑味を除いた吟醸種のような、余韻に浸れる味わいのある講座にしたい、と考えています。

このことは、今現在もあまり変わってないなあ！というのが実感です。

講座を立ち上げた初年度は、A3二つ折りで可愛いデザインのチラシを、淀屋橋駅辺りで出勤途中のOLに手渡したり、新聞社廻りなど意欲的に動きました。参加者も3年間位は平均年齢20代をキープしていたけれど、それ以後はスタッフも含めて、高齢化し現在に至っています。コロナで中断した後、講座内容、運営スタッフ等、どのように再構築するか?! 大きな問題となっているのが現状です。

2020年度 自然かんさつ塾 募集中心!

この講座は「自然観察」を通して、野生動物の観察、植物、鳥、魚などの見方、探し方、さらに自然の保全を「知識」ではなく「実践」で学びます。ユニークで面白い観察会と楽しくスタッフ役が期待されています。今年までには2000人以上の参加者、少人数で実施します。ユニークで面白い観察会と楽しくスタッフ役が期待されています。今年までには2000人以上の参加者、少人数で実施します。

●講座の内容とスケジュールの紹介●

1	4/12 (日) 9:30~15:00: ニュートラム南東トレードセンター一帯観察会 ●大阪の自然を守る: 南港野鳥園での観察会と自然観察入門	講師: 高田 博
2	4/26 (日) 9:30~12:30: 南港石浜水門観察会 ●自然観察: 八幡野鳥園: 桜の名所での観察会	講師: 木村 真
3	5/10 (日) 9:30~12:30: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: 菅井 啓之
4	5/24 (日) 10:00~13:00: 南港水門観察会 ●自然観察: 大阪唯一の自然海岸 長浜海岸で観察会	講師: 菅井 啓之
5	6/6 (土) 18:00~21:00: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ
6	6/20 (土) 10:00~15:00: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: 河合 典孝
7	9/27 (日) 9:30~12:30: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ
8	10/11 (日) 9:30~12:30: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ
9	11/1 (日) 10:00~13:00: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ
10	11/22 (日) 9:30~12:00: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ
11	12/19 (土) 15:00~18:30: 南港水門観察会 ●自然観察: 南港水門観察会	講師: スタッフ

●お申し込み●
2020年 4月12日~12月19日 (全11回)
参加費: 8,000円 (税別) (保険料込み、交通費は各自負担)
定員: 25名 (先着順)
申込方法: 2020年 3月30日 (月) まで
申込先: 事務局 (お問い合わせは事務局まで)
お申し込みは事務局まで (お申し込みは事務局まで)
お問い合わせ: 事務局 (お問い合わせは事務局まで)
お問い合わせ: 事務局 (お問い合わせは事務局まで)

自然かんさつ塾 チラシ (2020)



童心に帰る磯観察



熱烈講師の宿泊研修

新・里山講座

文 大塚 陽一(新・里山講座担当)

なぜ里山講座を

1960年代、高度経済成長期に入るとエネルギーの転換、労働人口の移動等により里山は取り残され、宅地・商工業地・ゴルフ場等の開発、放棄地の拡がりにより荒廃していきます。この時代に当協会は故高橋理喜男会長のもと木下陸男氏(当時:当協会副会長)、故重松敏則氏(当時:大阪府立大学講師)を中心に生態系の保全を前提に、市民による、市民のための里山を中心にした自然を活かした社会を提唱、1986年に第1回里山シンポジウム開催し社会に投げかけます。その後、人と自然の共生を目的に里山を維持管理するためのボランティア育成の里山講座を1991年に始めました。

里山講座は活況を呈し里山がブームに

その後、里山管理指導者養成講座、以後毎年・年3回実施。講座には全国より多くの市民が受講、テキ

スト「里山管理ハンドブック」も冊子化(B5版88p)、これは現在でも里山管理のバイブルとなっています。1997年には行政の要請により自治体担当者向けに里山管理リーダー養成講座を実施、さらに岸和田市、交野市、池田市等からの依頼で当該地区の里山で市民講座を実施しました。

里山保全活動グループの誕生

1993年頃より里山の整備に取り組み、荒廃した里山の生きものの救出、里山景観復元、触れ合いの場等への想いを持った講座修了生(市民ボランティア)による里山保全活動グループ(以下、里山Gという)が次々に誕生します。

里山Gの活動が10数年を過ぎると、生物多様性の復元、自然観察会やお楽しみ行事等の文化的活動の拡がり、生きもののモニタリング調査活動等により「人と自然の

共生」の取り組みが進み、当初の狙いの里山Gが活動を始めたことで2007年には里山講座は休止しました。

新・里山講座開講の経緯

ところが数年が過ぎても里山の開発と荒廃が後を絶たないこと、里山Gはメンバーの固定化・高齢化等により次世代につなぐ人材が求められていました。里山Gの課題である新たな市民ボランティア育成のために、2017年に新・里山講座を開講しました。修了生は約100名となり約40%の方は里山Gで活動されています、中には里山Gを引き継いだ方も現れました。

しかし、第6回を終えて担当者が退任し、スタッフの研修などを進めましたが、引継ぎ者が不在で講座を休止しています。修了生の会と共に継続して講座を運営することが課題となっています。



大阪府立青少年総合野外活動センターでの講座スナップ(妙見里山倶楽部元会長 長岡一夫氏提供)

新・里山講座カリキュラム(第8回分)

知識編・座学(オンラインを含む)			技能編・実習		
項目	講師	所属(当時)	項目	講師・里山保全活動グループ	会場
保全協会の概要	木村 進	保全協会事務局長	樹木の調べ方	土生陽子(木象嶽こばみつ亭代表)	吹田市・紫金山公園
保全協会が目指す里山とは	常俊容子	ナチュラリスト講座企画運営	ロープワーク等	岡本利典(紫金山みどりの会)	吹田市・紫金山公園
森林のしくみ	藤原宣夫	大阪公立大学大学院教授	下草刈り	紫金山みどりの会(武田義明会長)	吹田市・紫金山公園
人の暮らしと里山	佐久間大輔	大阪市立自然史博物館学芸課長	竹間伐	妙見里山倶楽部(井上登紀夫会長)	豊能町・高代寺山
紫金山公園の植生	武田義明	紫金山みどりの会会長	人工林間伐	富田林の自然を守る会(上角敦彦会長)	富田林市・奥の谷
市民運動が公園計画を作った	金谷 薫	紫金山みどりの会事務局長	お茶摘み	太子町葉室里山クラブ(小路公之代表)	太子町・葉室
里山管理のための植物調査	土生陽子	木象嶽こばみつ亭代表	竹炭焼き	富田林の自然を守る会炭焼班(米田彰一)	富田林市・奥の谷
安全講習(災害事例とKYK)	大塚陽一	新・里山講座スタッフ	毎木調査	五月山グリーンエコー(中川勝弘代表)	池田市・五月山緑地
里山保全と生物多様性	田淵武夫	富田林の自然を守る会	森つくり	五月山グリーンエコー(中川勝弘代表)	池田市・五月山緑地

講座の現状と今後に向けて

文 木村 進(編集委員)

本号の特集では、現在も継続中の6講座の中心的なメンバーに、開講時の経緯から現状・今後の課題などを書いていただいた。講座は、生物への興味の拡大や保全活動の入口として、協会への入会のきっかけとして、協会員の自然観察・調査・保全活動の知識や技能の向上を図るためにも非常に重要であることが再確認されたが、継続が困難になっている講座もあることが明らかになっている。ここでは、協会の主催講座の課題と今後の展望について考えてみたい。

最近の開講状況と受講者数の変化

6講座の近年の受講者数の変遷を、各年度の事業報告書よりまとめると表ようになる。表中の「中止※」はコロナ禍による中止を示しており、各講座によって状況は異なるが、1～2年間の中止を余儀なくされたことがわかる。それ以外の「中止」は、2025年度の市民大学のように受講希望者が少なかった場合もあるが、スタッフの不足で開講できなかったものも多い。市民大学は14～30人の受講生があつたのに、コロナ禍後は、15人⇒8人と受講者が減少し、2025年度ははじめて開講できなかったが、他の講座はそれほど減少していない。これは、市民大学の受講生の多く(特に男性)は定年後の方であり、以前の60歳定年制が近年は65歳まで延び、その後も勤務を継続される方も多く、受講生の高齢化が著しいことが原因と考えられる。例えば2023年度の平均年齢は64.6歳で、70歳代7人・60歳代5人・50歳代2人・40歳代2人であつた。

主催講座の今後の発展に向けて

各講座の現在の課題としては、受講希望者の減少とスタッフ(特に中心的なスタッフ)の不足があげられている。この背景には前述したように、受講生の高齢化がある。その結果、修了後に協会活動に参加したり、講座のスタッフをしていただける期間が短くなるという悪循環が生じている。退職年齢の上昇はやむを得ないとしても、コロナ禍で講座が中止になって、修了生が減少したことが講座の運営に大きな影響を与えているのは事実であろう。この課題にどのように対処するか、各講座スタッフの皆さんはご苦労をされているところであるが、受講申込者が少なく中止となった市民大学のスタッフ会議では以下のような議論があつた。

- ①講座の目的・意義を明確化し、協会内外の他の講座との差別化をはかることが重要である。
- ②高齢化で従来の講座内容では負

担が過重。対応するスタッフの減少もあり内容を精選する。

- ③受講生募集の広報をこれまでのチラシ配布中心から、ネットによる拡散に重点を移す必要がある。

そこで、開講当初は40回弱であつた回数を、近年は25回程度にしていたが、2026年度は12回に精選した。受講料も5～6万円から2万円とした。講座は少なくなったが、受講中に他の協会イベントへの参加を勧めることで、充実を図っていくことを考えている。本会誌にチラシを折り込んで、これから募集を始めるところであるが、受講希望者の増加を期待している。

今後は協会内の各講座のスタッフ間でノウハウの共有や、修了生に他の講座を紹介するなどの情報交換や交流をもっと活発にすることも必要だろう。さらに講座が活性化されることを願ってこの文を終えたい。

最近の講座受講者数の変化

年度	ナチュラリスト講座	自然観察インストラクター養成講座	自然環境市民大学	自然かんさつ塾	新・里山講座	環境共育プログラム指導者講習会
2017年度	9人	12人	14人	春16人/秋11人	15人	1回/12人
2018年度	5人	16人	春29人/秋25人	春のみ	15人	8回/59人
2019年度	2人	22人	春17人/秋20人	春19人	13人	2回/40人
2020年度	9人	中止※	中止※	中止※	中止※	中止※
2021年度	6人	14人	中止※	中止※	14人	10回
2022年度	4人	中止※	9月開講	秋16人	中止	17回/68人
2023年度	6人	20人	～7月:15人	春20人/秋18人	中止	4回/20人
2024年度	5人	18人	8人	春10人	14人	10回/104人
2025年度	実施中	実施中	中止	中止	中止	実施中

注)「中止※」は、コロナ禍による中止を示す。春・秋は、半年の講座。

各講座の概要

ナチュラリスト入門講座 哺乳動物を主とした里山の野生生物の観察を中心に、座学とフィールドで自然を学び観て考える目を養い、フィールドワーカーを育てる講座。 自然観察インストラクター養成講座 自然の感動を伝え、広げるための自然観察インストラクター養成を目的とした講座 初心者のための自然かんさつ塾 自然に親しもうとする人を対象に、植物や野鳥などの野外実習を通して、その手法を伝える入門講座。親子連れも歓迎。	自然環境市民大学 動植物・生態系やその保全について体験的に学び、自然環境の保全活動を実践できる人材を養成し、里山保全・自然環境学習・環境保全への社会的要求に応えるための講座 新・里山講座 里山に関心を寄せる人々に、保全活動に必要な知識と技術の習得をめざす講座 プロジェクト・ワイルド等の指導者講習会 野生生物をテーマとした環境教育プログラムの企画進進行を体験的に身につけるための講座。子どもへの環境教育を実践できる指導者の育成をめざす。
---	--